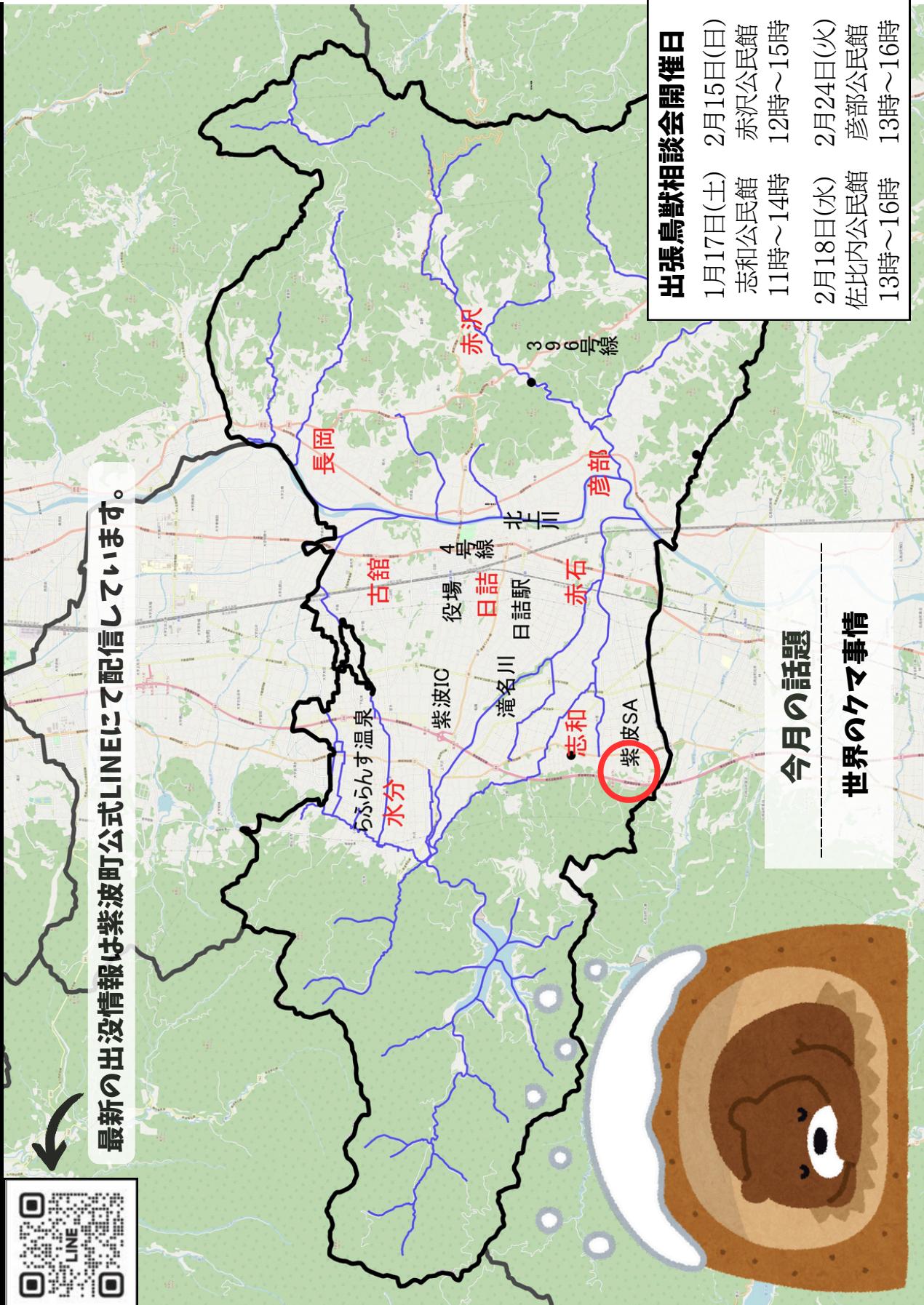


紫波町におけるR1～R6年のケマ出没情報 (1～3月)



最新の出没情報は紫波町公式LINEにて配信しています。



紫波ケマ通信

10号

発行

2026年1月15日

紫波町環境課

地域おこし協力隊
近藤雄太

出張鳥獣相談会開催日

1月17日(土)	2月15日(日)
志和公民館	赤沢公民館
11時～14時	12時～15時
2月18日(水)	2月24日(火)
佐比内公民館	彦部公民館
13時～16時	13時～16時

今月の話題

世界のケマ事情

1月のクマ情報

発行日 令和8年1月15日

1月～3月の間、基本的にクマは冬眠をし
ているため出没が確認されることは滅多にあ
りませんが、今年は全国的に冬眠をしないク
マというものが話題になっており、紫波町でも
1月になってからも紫波サービスエリア周辺
でクマの痕跡が確認されています。

今 periods はクマと遭遇するリスクは非常に
少ないですが、ゼロではないということは覚
えておいていただければ幸いです。

冬に出没をするクマは場所を移動するため
などの理由でたまたま冬眠穴から顔を出して
きたクマか、冬眠をせずに餌を探しているク
マのどちらかです。前者と遭遇することはま
で、すぐに冬眠に戻るため出没が続くこと
はありませんが、後者の場合は山にエサがな
い季節であるということも相まって、人家周
辺に頻繁に出没を繰り返すことも少なくあり
ません。

この時期にクマが餌として狙うのは残つて
いる柿の実や家畜用の飼料、保管している米
などになります。クマと遭遇するリスクを減
らすためにはこれらのクマを呼び寄せる誘引
物の管理を徹底して、クマに餌場として覚え
られないようにすることが最善です。

また、来年度の春には今年度の秋の実りが
少なかつたことからクマが人家周辺に出没す
るリスクが非常に高まると懸念されますの
で、今のうちから誘引物の管理を見直すこと
は今後の被害リスクを抑えることにもつなが
ります。

クマの出没が少ない今の季節だからこそ、
身近なクマ対策について見直す良いタイミング
ではないでしょうか。

実はパンダも

ちょこつとクマ知識



今月の
話題

世界のクマ事情



世界には全部で8種類のクマが
存在している。ホッキョクグマ、

ヒグマ、アメリカクロクマ、アジ
レーグマ、ナマケグマ、メガネグ
マ、ジャイアントパンダだ。

このうち日本に野生で生息して
いるのはヒグマ（北海道）とツキ
ノワグマ（本州以南）の2種類に
なる。

クマの仲間で最も大きいのはホ
ッキョクグマで、体長は2.5m
を超えて、体重は600kgを超える
こともあります。逆に最も小さいの
はマレーグマで、体長は100cm程
とされる。

世界には全部で8種類のクマが
存在している。ホッキョクグマ、

ヒグマ、アメリカクロクマ、アジ
レーグマ、ナマケグマ、メガネグ
マ、ジャイアントパンダだ。



日本のヒグマやツキノワグマが農作物を荒らしたり、人に危害を加
えたりすることがあるというのは、ニュースなどで皆さんもよくご存
じのことだろう。世界各地でもその地域に生息するクマによる農作物
被害や人身被害は発生している。今回はそんな世界のクマ事情につい
て少し触れてみたいと思う。

クマの中でも攻撃性が高いとされるのはホッキョクグマ、ヒグマ、
ナマケグマであり、特にホッキョクグマとヒグマは体格が大きく攻撃
力が高いため、死亡につながる事故も少なくない。ホッキョクグマが
人間の生活圏に出没することは少なく、人身事故が起ころるのは稀であ
るとはされているが、地球温暖化により海面の氷が減少していること
でホッキョクグマが人間の生活圏に出没するケースは増加している。
アメリカではクマによるキャンプ場での人身被害が問題となつてお
り、クマを寄せ付けない誘因物管理の徹底を行うためにベア・キヤニ
スター（キャンプ中の食料を安全に保管しておくための保管庫）の設
置が義務づけられている。

イタリア北部では絶滅回避のためにクマが再導入をされた過去があ
るが、近年では再導入された地域でクマによる農作物被害や人身被害
が問題となつており、クマを管理することの難しさを感じさせる。
比較的温厚であるとされているパンダでも時には人身事故を引き起
こすことがある。

世界にいる8種類のクマのうちヒグマとアメリカクロクマを除く6
種類が絶滅の恐れがある種とされており、毛皮などの利用目的による
乱獲や農作物等の被害防止を目的とした捕獲によりその数を減らして
いる種も存在している。

一方で、クマの被害が増加しているのは
日本だけではなく、世界的に見てもクマに
よる農作物や人への被害は増加傾向にある
とされている。その原因としてはクマの生
息地減少や人の生活圏の拡大にあるとされ
ており、クマの保護と人の安全のどちらを
取るべきであるかということで問題となっ
ているのは日本だけに限った話ではない。

